

研究ノート

カレン語の研究*

塩 原 佑 実

1. はじめに

カレン語は、タイ北部からビルマ（ミャンマー連邦共和国）に暮らす少数民族、カレン族の言葉である。筆者は2014年から2015年の間に4回、計約5か月、タイ北西部に位置する Ban Huay Hin Lahd Nai（チェンライ県 Chiang Rai ウィアンパオ郡 Wiang Pa Pao バンボン区 Ban Pong ホエヒンラートナイ村 図1参照）に滞在し、カレン語の聞き取り調査を行った。ホエヒンラートナイ村は人口100人程度のスゴー・カレン族の村である。村の小学校ではタイ人の先生がタイ語で教育を行っているが、村人同士の会話は全てカレン語で行われており、どの年代もカレン語を母語として話すことができる。聞き取り調査は特定の人の話し方や発音に偏らないよう、なるべく多くの村人と会話をしながら単語や文を書きとった。ホエヒンラートナイ村ではカレン語の文字を読み書き出来る人はほとんどいなかったため、聞き取り調査は発音記号などを使いメモをとった。

本論文は、ホエヒンラートナイ村で筆者が集めたスゴー・カレン語のデータに加え、スゴー・カレン語に関しては Jones (1961)、加藤 (1993)、ポー・カレン語に関しては加藤 (2004) を参考に、スゴー・カレン語とポー・カレン語の比較を行う。焦点を当てるのは、ポー・カレン語の ‘mə-’ とスゴー・カレン語の ‘mo’ の比較である。第2節では、カレン族について概要を説明する。第3節では、先行研究に基づく本論文の問題提起を行うとともに、ポー・カレン語の ‘mə-’、スゴー・カレン語の ‘mo’ の基本的な用法を示す。第4節から第6節では、加藤 (2004) がポー・カレン語の ‘mə-’ が現れる



図1 ホエヒンラートナイ村の位置

ことができないとしている否定節、使役構文、条件節について、スゴー・カレン語とポー・カレン語の形式を確認し、スゴー・カレン語の ‘mo’ がこれらの中に現れることが出来るかどうかを調査して比較を行った。第7節で本論文のまとめを行う。

2. カレン族概要

本節では、加藤 (2004)、Moonieinda (2010)、大野 (1987)に基づいてカレン族およびカレン語の概要を説明する。

2.1. カレン族について

カレン族は、東南アジアのタイ北部からビルマを中心に暮らす民族である。Moonieinda (2010)によれば、カレン族の人口は約700万から800万人。加藤 (2004)によれば、カレン語話者の人数は300万人から400万人程度である。ひとくくりにカレン族と言っても、カレン族は30から40ほどの下位集団に分けることができる。この下位集団は大きくポー・カレン族とスゴー・カレン族に分けることができ、この2つの下位集団でカレン族の70パーセントを占めると言われている。タイ北部は山岳少数民族が多く、カレン族もその民族の一つであるが故、山岳民族とみなされることが多いが、ビルマに暮らすカレン族の多くは平地に住んでいる。宗教は、基本的に仏教徒が多いが、カレン族全体の15パーセント程度はキリスト教徒である。カレン族の伝統的な宗教は、アニミズム、いわゆる精霊信仰と言われるもので、日本古来の神に対する考え方に似ている。カレン族には多くの儀式が存在するが、これはカレン族独自のアニミズム信仰によるものが多い。

2.2. カレン族のことは

カレン語の言語学的な位置づけは諸説あるが、現在ではシナ・チベット (Shino-Tibetan) 語族チベット・ビルマ (Tibeto-Burman) 語派に属するという説が最も有力であると考えられている。カレン族はポー・カレン族、スゴー・カレン族という大きな2つの下位集団に分けることが出来るということを2.1.でも述べたが、言語学上もポー・カレン語とスゴー・カレン語は分けて考えられており、ポー・カレン語話者とスゴー・カレン語話者の相互理解は非常に困難とされている。また、ポー・カレン語にも方言が存在し、加藤 (2004)では東部ポー・カレン語と西部ポー・カレン語にグループ分けしており、ポー・カレン族同士であっても、東部ポー・カレン語話者と西部ポー・カレン語話者の意思疎通は難しいと述べている。ポー・カレン語、スゴー・カレン語どちらも過去にモン語 (Mon) の影響を大きく受けたと考えられており、モン語からの借用

語も多く用いられている。モン語はオーストロアジア語族モン・クメール諸語に属す言語だが、かつて東南アジア大陸部一帯に広がっており、ビルマ一帯をカレン族とモン族で占めた時代があったと言われていることから、その時代にカレン語はモン語から大きく影響を受けたのではないかと考えられる。ポー・カレン語、スゴー・カレン語ともに、語順により主体や対象などの意味関係を表す孤立語的な言語で、語の屈折変化は起こらない。基本語順は多くのチベット・ビルマ語派がSOVであるのに対し、ポー・カレン語、スゴー・カレン語ともにSVOである。

2.3. カレン語の周辺の言語

東南アジア大陸部にはベトナム、カンボジア、ラオス、タイ、マレーシア、ビルマの6つの国が存在し、この6つの国々では主にベトナム語、クメール語、ラオ語、タイ語、マレー語、ビルマ語が使用されている。東南アジア大陸には多くの少数民族が存在し、これらの国々に単一民族国家は無く、皆多数の民族で成る多民族国家である。これらの少数民族は政治的理由からそれぞれの国の公用語で教育を受け、生活をしているが、彼らには彼らの言語がある。カレン語もそのような民族の1つである。

東南アジア大陸部の言語の多くは、カレン語と同じSVOの語順で、単音節からなる孤立語に属す言語が多い。このような孤立語の言語は特に声調を使うことが多く、発音が同じでも声の高低により意味が区別される。カレン族が多く暮らすミャンマー連邦共和国の公用語であるビルマ語は、カレン語と同じシナ・チベット語族チベット・ビルマ語派である。しかし、語順はSOVで、典型的には膠着語である。膠着語は、助詞や助動詞などの接辞によって内容語の文法的機能が決定する言語のことであり、日本語も膠着語に分類することができる。

東南アジア大陸の多くの民族が中国から南下してきたと考えられており、多くの言語が中国語からの借用語を利用している。また、インドからの影響も大きく受けている地域が多く、タイ語やクメール語はサンスクリット語からの借用も多くみられる。

3. ‘mə-’ ‘mo’ に関する先行研究と問題提起

3.1. ‘mə-’ と ‘mo’ の関係

カレン語の文法に関する研究はJones (1961)や、加藤 (1993)、加藤 (2004)などがある。Jones (1961)は、スゴー・カレン語のモールメイン方言 (Moulmein Dialect) の文法をまとめ、ポー・カレン語とスゴー・カレン語のモールメイン方言とパテイン方言 (Bassein) を比較研究したものである。加藤 (1993)は、スゴー・カレン語の文法の中で

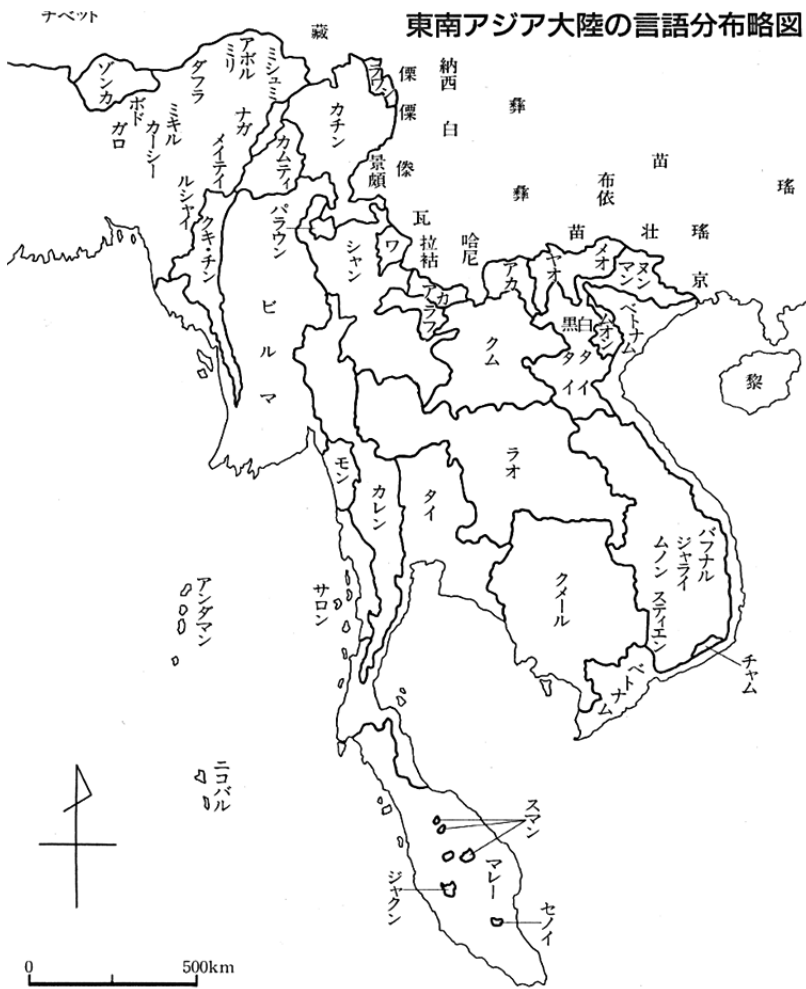


図2 大野（1987）による東南アジア大陸の言語分布略図

も特に動詞連続についての研究をまとめたものである。加藤（2004）は、ポー・カレン語の中でも、ビルマのカレン州およびテナセリム管理区周辺で話される東部ポー・カレン語に焦点を当てた論文で、東部ポー・カレン語の文法記述を言語学的な立場から包括的に行っている。加藤は、ポー・カレン語の研究を始める以前にスゴー・カレン語の研究を行っていたため、この論文中にポー・カレン語とスゴー・カレン語を比較するような

記述がときおりされている。

加藤 (2004) は、ポー・カレン語の非現実法を表す動詞助詞 ‘mə-’ は、スゴー・カレン語の ‘mo’ と同源であり、この ‘mo’ は「～したい」という意味を表すと記述している。さらに、この非現実法を表す動詞助詞 ‘mə-’ には決して現れることが出来ない環境が3つあると述べている。それは、(a) 否定を表す助詞 ‘ʔé’ ‘lə-’ が使われた節、(b) 使役構文における補文、(c) 条件や仮定を表す助詞 ‘ʔè’ に導かれた節である。

スゴー・カレン語の現地調査で「～したい」という表現の構造に興味を持っていた筆者は、‘mo’ と ‘mə-’ のルーツが同じであれば、使用される環境も同じなのだろうかという疑問を持ち、ポー・カレン語で ‘mə-’ が現れることが出来ない3つの環境に対応するスゴー・カレン語の構文で ‘mo’ が使えるかどうかという問題を提起し調査を行った。

3.2. ポー・カレン語の mə-

ポー・カレン語には過去、現在、未来のような時制を表す形式はなく、基本的には「昨日」「今日」「明日」といった時を表す名詞を置くことで出来事の時を表す。しかし、事象が現実か非現実かという区別があり、非現実を表す時は動詞複合体の先頭に動詞助詞 ‘mə-’ が置かれる。‘mə-’ は過去、現在、未来すべての事象に対して使うことができる¹。

- | | | | | | |
|-----|---------------|------|-----|---------|---------------|
| (1) | muwá | ʔəwê | mə- | thəuNli | |
| | yesterday | 3se | 非現 | dance | |
| | 「昨日、彼は踊っただろう」 | | | | (加藤2004: 278) |

- | | | | | | |
|-----|----------------|------|-----|---------|---------------|
| (2) | ʔəkhâjò | ʔəwê | mə- | thəuNli | |
| | now | 3se | 非現 | dance | |
| | 「今、彼は踊っているだろう」 | | | | (加藤2004: 278) |

- | | | | | | |
|-----|--------------|------|-----|---------|---------------|
| (3) | kèkhò | ʔəwê | mə- | thəuNli | |
| | tomorrow | 3se | 非現 | dance | |
| | 「明日、彼は踊るだろう」 | | | | (加藤2004: 279) |

非現実の ‘mə-’ を付けない現実法の文では、現在、過去のことを表すことは出来るが、未来のことを表すことは出来ない。また、‘mə-’ が従属節で使われると、従属節の事象が主節の事象の後に起こることを意味する。

加藤 (2004) によれば、この非現実を表す動詞助詞 ‘mə-’ は次の3つの環境で現れることができない。

- (a) 否定を表す助詞 ‘ʔé’ ‘lə-’ が使われた節

- これら3つの構文について、第4節—第6節でポー・カレン語とスゴー・カレン語を比較する。

スゴー・カレン語の‘mo’は「～したい」という意味を表す。加藤(1993)では‘mo’を法動詞としているが、Jones(1961)では一般動詞として扱っている。本論文では、‘mo’が単独では現れることが出来ないという特徴を持つことから、‘mo’は法動詞と考える。

(4)	jə-	mo	ʔɔ	θa	me	
	1sg	want to	eat	heart	rice	(加藤1993: 194)
(5)	ta	mo	ʔɔ	jə-	θa	me
		want to	eat	1sg	heart	rice
						(加藤1993: 195)

しかし、筆者がホエヒンラートナイ村で行った調査では、(4)(5)のような表現は使われておらず、‘mo’を使う表現で確認できたのは(6)の形だけであった。

- この表現は感情の主体が現れていないが、状況や文脈から感情の主体が誰であるか判断することができる。あえて感情の主体を提示する場合は文頭に置く。加藤(1993)の(5)の例文では感情の主体は人称代名詞のみしか出てこないが、筆者のホエヒンラートナイ村での調査によれば、文頭に置く感情の主体は人称代名詞だけでなく、人名などにも使うことが出来る。このことから、(6)の感情の主体は、トピック(主題)ではないかと筆者は考える。

- 53 —

(9) ʔə- ta mo ʔɔ θa me 「彼/彼女はご飯が食べたい」

(10) anu ta mo ʔɔ θa me 「アヌ（人名）はご飯が食べたい」

このように、感情の主体の人称に関わらず形式主語であるはずの ‘ta’ の前に感情の主体を置くことから、ホエヒンラートナイ村では ‘ta’ を用いた ‘ta mo V θa (O)’ という表現が「～したい」を表す表現として慣用化し、感情の主体を提示するときはトピックとして文頭に置くようになったと推測できる。

4. 否定表現と ‘mə-’ / ‘mo’

4.1. ポー・カレン語の否定表現と ‘mə-’

ポー・カレン語の否定は助詞を付けることによって行われ、主節の場合と従属節の場合で使われる助詞と助詞を付ける位置が異なる。

主節を否定する場合、動詞句の後に否定を表す副助詞 ‘ʔé’ を付ける。

(11) jə- ʔáN ʔé

1sg eat NEG

「私は食べない / 私は食べていない / 私は食べなかった」 (加藤2004: 468)

(12) jə- li cōN k é ləN ʔé

1sg go school possible any longer NEG

「私はもう学校に行けない」 (加藤2004: 468)

(12)の ‘ləN’ は、否定節に現れる「もう～しない」という意味を表す動詞助詞で、必ず否定の助詞と共に使われる。否定を表す副助詞 ‘ʔé’ が使われた節は現実法・非現実法の区別を失う。よって非現実を表す ‘mə-’ は ‘ʔé’ が使われた節では現れることが出来ない。

(13) * jə- mə- li ʔé

1sg go NEG

「私は行かない」 (加藤2004: 281)

従属節を否定する場合、動詞または動詞複合体の前（先頭）に否定を表す動詞助詞 ‘lə-’ を付ける。この動詞助詞 ‘lə-’ を使用した場合、その動詞の直後、もしくはその動詞句末に ‘lə-’ を補助する ‘bá’ がおかれることが多い。この ‘bá’ は省略可能である。

(14) nə- ʔé lə- li capâN (bá) nɔ, jə- mə- li

2sg 条 NEG go Japan (NEG’) 1sg 非現 go

「あなたが日本に行かないなら、私が行く」 (加藤2004: 281)

‘lə-’ が現れた節も主節の否定同様、非現実を表す ‘mə-’ が現れることが出来ない。

- (15) *kèkhó jə- mə- lə- lì (bá) ʔəkhucòN, lì khè phı jə xɔ
tomorrow 1sg 非現 NEG go (NEG’) because go instead help 1SG 文助
「明日、私は行かないので、代わりに行ってくれ」 (加藤2004: 281)

このように、ポー・カレン語の否定節は、主節・従属節に関わらず ‘mə-’ が現れることができない。

4.2. スゴー・カレン語の否定表現と ‘mo’

スゴー・カレン語の否定は否定辞 ‘təʔ’ を動詞の前に付けることによって行われる。文末に ‘bá’ を付けることがあるが、これは省略可能である。筆者が集めたデータにはほとんど ‘bá’ は出てこない。

- (16) jə- təʔ ʔɔ
1sg NEG eat
「私は食べない/食べなかった」
- (17) jə- lɛ co təʔ θɛ
1sg go school NEG possible
「私は学校に行けない」
- (18) nə- mi təʔ lɛ capa jə- lɛ
2sg 条 NEG go Japan 1sg go
「あなたが日本に行かないなら、私が行く」

(16) (17) は主節の否定の例である。(18) は従属節の否定の例である。スゴー・カレン語の否定は、ポー・カレン語の否定とは異なり、主節、従属節ともに同じ形をとる。

スゴー・カレン語の ‘mo’ は、次のように否定辞 ‘təʔ’ が使われた節でも現れることができる。

- (19) jə- ta təʔ mo ʔɔ θa me
1sg 形 S NEG want eat heart rice
「私はご飯を食べたくない (お腹がすいていない)」

ただし、今回筆者は否定辞 ‘təʔ’ と欲求を表す ‘mo’ が共に使われている表現は「～したい」を表す慣用表現 ‘ta mo V θa’ の場合のみしか見つけることができなかった。すなわち、ホエヒンラートナイ村のスゴー・カレン語では、‘ta mo V θa’ に含まれる ‘mo’ は否定節にも現れることができるということである。

5. 使役構文と ‘mə-’ / ‘mo’

5.1. ポー・カレン語の使役構文と ‘mə-’

加藤(2004)では、ポー・カレン語の使役構文を2つのタイプに分けている。1つは、使役助詞が被使役動詞の前におかれ動詞複合体をつくり、被使役者を目的語にとるタイプ。もう1つは、使役動詞が被使役者と被使役動詞からなる補文を目的語としてとるタイプである。

Type 1: [VP [V 使役要素-被使役動詞] [NP 被使役者]]

Type 2: [VP [V 使役要素] [補文 [NP被使役者] [V被使役動詞]]]

加藤(2004)はType1の使役要素として助詞と動詞があると述べている。助詞を使う場合は「AがBにVさせる/させた」という意味で使われる使役構文である。これに対し動詞を使う場合は、主語が被使役者もしくは被使役物に働きかけることにより、被使役者/被使役物に変化をもたらす、以下のような概念構造を想定できるような文を指している。

[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE [AT a]]]

本論文では、助詞を使い「AがBにVさせる」という意味で使われるものを使役構文として扱う。

Type 1 に現れる使役助詞は、dà, mà, phulân, kò, lò の5つである。このうち ‘dà’ 以外の4つはそれぞれ単独で動詞として使用することも出来る。(‘mà’ = 「する、行う」、‘phulân’ = 「やる、与える」、‘kò’ = 「誘う」、‘lò’ = 「語る」)

(20) jə- dà klí ʔəwê

1sg 使 run 3se

「私は彼に走らせた」

(加藤2004: 518)

(21) jə- dà ʔân ʔəwê mɪ

1sg 使 eat 3se rice

「私は彼にご飯を食べさせた」

(加藤2004: 518)

Type 2 は、使役動詞が被使役者と被使役動詞で成る補文をとる文である。Type 2 で現れる使役動詞は、ʔân məN 「命ずる」、pl é tɔ 「許可する」、phulân 「与える」の3つである。

(22) jə- ʔân məN ʔəwê li

1sg order 3se go

「私は彼に行くように命じた」

(加藤2004: 517)

(22') *jə- ʔáNməN ʔəwê mə- lɪ
1sg order 3se go (加藤2004: 529)

[_{VP} [_V 使役要素 *muo*] [_{補文} [_{NP} 被使役者] [_V 被使役動詞]]]

- (24) jə- mʊə ʔə ʔə me
1sg use 3se eat rice
「私は彼にご飯を食べさせた」

(23') *jə- mɔ mʊɔ ʔə lɛci
 1sg use 3se run

- 57 —

- (26) jə- ʔè vɛ, nə- mə- ʔɔ̌ ɛâ
1sg 条 come 2sg 非現 be 疑問

「私が行ったら、あなたはいますか？」 (加藤2004: 281)

否定、使役と同様、条件節でも ‘mə-’ は現れることができない。

- (25') *nə- ʔè mə- mî báθ à thàiN
2sg 条 sleep 欲求 go back (加藤2004: 389)

- (26') *jə- ʔè mə- vɛ, nə- mə- ʔɔ̌ ɛâ
1sg 条 come 2sg 非現 be 疑問 (加藤2004: 281)

6.2. スゴー・カレン語の条件節と ‘mo’

スゴー・カレン語の条件節は従属節の動詞の直前に ‘mé’ を付けることで表される。

Jones (1961) では、‘mé’ は法動詞であると記述されている。

- (27) mé ʔo ta mo ʔɔ̌ θa
条 exist 形S want eat heart
「もしあるなら、食べたい」

- (28) nə- mé tə lɛ jə- tə lɛ
2sg 条 NEG go 1sg NEG go
「あなたが行かないなら、私は行かない」

スゴー・カレン語の条件節の中では ‘mo’ を使うことができる。

- (29) ʔə mé ta tə mo ʔɔ̌ θa me ʔə tə ʔɔ̌ me noɕɛa
3sg 条 形S NEG want eat heart rice 3sg NEG eat rice at all
「彼はお腹が空いていなければ、決して食べなかった」

ただし、ここでも ‘mo’ は「～したい」を表す慣用表現 ‘ta mo V θa’ の一部であり、この表現全体が条件節内に現れている。条件を表す節の中に ‘mo’ が現れる例として以下の文も調査により確認できた。

- (30) ta mo mi θa gɛlɔ̌
形S want sleep heart go back
「寝たければ、帰なさい」

しかし、条件を表す法動詞 ‘mé’ が無いことから、この文の前半が条件節であるかどうかは明らかではない。

7. まとめ

スゴー・カレン語で「～したい」を表す法動詞‘mo’の特徴を探るため、‘mo’とルーツが同じであると考えられているポー・カレン語の動詞助詞‘mə-’と使われる状況を比較してきた。調査で分かったことを表にまとめると以下のようになる。

	ポー・カレン語 ‘mə-’	スゴー・カレン語 ‘mo’
否定節	×	○
使役構文における補文	×	×
条件節	×	○

ポー・カレン語の‘mə-’が否定節、使役構文における補文、条件節のいずれでも現れることができないのに対し、ホエヒンラートナイ村で話されているスゴー・カレン語の‘mo’は、否定辞と条件節では現れることができ、使役構文における補文では現れることができないという特徴を持つということが確認できた。

ポー・カレン語の‘mə-’スゴー・カレン語の‘mo’は同源であるかもしれないが、使われる環境は異なることが明らかになった。筆者が現地調査を行ったホエヒンラートナイ村では、‘mo’は‘ta mo V θa’という形で慣用化されており、否定・条件節の中にも非現実法の表示としてではなく、この慣用表現の一部として現れていた。さらに、加藤(1993)で調査が行われたビルマ側のスゴー・カレン語では、‘mo’のみを動詞の直前に置けば「～したい」という意味になる、すなわち上記(4)(5)の形が可能であるのに対して、ホエヒンラートナイ村のスゴー・カレン語では「～したい」を表すには必ず‘ta mo V θa’の形が必要という点も、ホエヒンラートナイ村のスゴー・カレン語の‘mo’の特徴として挙げることができる。

参考文献

- Gilmore, D. (1898) *A grammar of the Sgaw Karen*. Rangoon: American Baptist.
- Jones, R. B. (1961) *Karen linguistic studies (Description, comparison, and texts)*. University of California publications in linguistic volume 25. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Moonieinda, A. (2010) *The Karen people: culture, faith and history*. Australia: the Karen Buddhist Dhamma Dhutta Foundation.

- 〈http://www.karen.org.au/Karen_Buddhist_Dhamma_Dhutta_Foundation.htm〉
- 飯島茂 (1971)『カレン族の社会・文化変容』 創文社
- 大阪大学言語文化研究科言語社会専攻「高度外国語教育全国配信システムプロジェクト タイ語独習コンテンツ」〈<http://el.minoh.osaka-u.ac.jp/flc/tha/index.html>〉 2016/11/11閲覧
- 大阪大学言語文化研究科言語社会専攻「高度外国語教育全国配信システムプロジェクト ビルマ語独習コンテンツ」〈<http://el.minoh.osaka-u.ac.jp/flc/bur/index.html>〉 2016/11/11閲覧
- 大野徹 (1987)『東南アジア大陸の言語』 大学書林
- 奥平龍二 (2005)「東京外国語大学附属図書館所蔵モン語文献：寄贈文献を中心として」『史資料ハブ：地域文化研究：東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀 COE プログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」』no.6 pp.112-122 文部科学省21世紀 COE プログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」総括班
- 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健 (2004)『言語学』 東京大学出版会
- 加藤昌彦 (1993)「スゴー・カレン語の動詞連続」『アジア・アフリカ言語文化研究』no.45 pp.177-204 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 加藤昌彦 (2004)「ポー・カレン語文法」 東京大学博士論文 〈<http://hdl.handle.net/2261/38120>〉
- コムリー・バーナード (2005)『新訂・世界言語文化図鑑』 東洋書林
- 藤井文男 (2003)「モン語口語に於ける音韻構造と正書法：古典的音韻論の試み」『茨城大学人文学部紀要・人文学科論集』40 pp.43-56 茨城大学
- 由本陽子 (2011)『レキシコンに潜む文法とダイナミズム』 開拓社

* 卒業論文および本論文作成にあたり、たくさんの方々にお世話になった。特に、カレン語の聞き取り調査に協力して下さったホエヒンラートナイ村の皆様、現地調査が出来るよう力をお貸し頂いた GONGOVA 草の根国際協力研修プログラムの皆様に、心から感謝申し上げたい。

¹ スゴー・カレン語、ポー・カレン語を分析するにあたり、いくつかの略語を使用した。

N : Noun (名詞)	V : Verb (動詞)
NEG : Negative (否定辞)	O : Object (目的語)
NP : Noun Phrase (名詞節)	VP : Verb Phrase (動詞節)
条 : 条件を表す助詞	使 : 使役を表す助詞
非現 : 非現実助詞	形 S : 形式主語
1sg : 一人称単数 (主語、所有形)	1se : 一人称単数強勢形
2sg : 二人称単数	2se : 二人称単数強勢形
3sg : 三人称単数	3se : 三人称単数強勢形
1SG : 一人称単数 (目的形)	文助 : 文助詞

加藤 (2004) によれば、強勢形は代名詞を音声的に目立たせるために使われている。三人称の代名詞には強勢形が使われることが多い。

例文冒頭の*は、当該の例が非文であることを示す。本文中で出典が記されていない例文は、現筆者が現地調査で集めた例文である。